

志賀直哉全集 別卷

志賀直哉宛書簡

志賀直哉全集 別卷

第十五回配本(全十四卷・付別卷)

昭和四十九年十二月十日 發行

定價 三千二百圓

著者 武者小路實篤
表者 里見 弴

發行者 岩波雄二郎

發行所 株式會社 岩波書店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

落丁本・亂丁本はお取替いたします

凡 例

一、本巻は、『志賀直哉全集』別巻として、志賀家に保存されている志賀直哉宛の諸家の書簡約三千四百通のうちより千二百五十一通を選び編集したものである。他全集その他よりの轉載は、夏目漱石、芥川龍之介、小林多喜二各一通の三通のみである。

一、配列は、生涯にわたって深い交わりのあった『白樺』中心メンバー及び『白樺』關係者、先輩ならびに同時代・後代の作家、畫家、學者、評論家の人々、志賀直哉直系の作家たちのグループにまず分ち、そのなかで各人別に年代順とし、各人別の書簡番號を付した。

一、發信人の氏名は、一般的にもっともよく知られている筆名でまとめた。たとえば、「溝井勇三」の名で出されていても「直井潔」とした（書簡本文では原形のままとした）。

一、宛名書の敬稱、及び「親展」「直披」の類は省略した。

一、日付は、自筆の日付を優先的に採った。それが明記されていない場合は消印の日付を採った。

一、年月の明記されていないもの、消印不明のものでも、内容によって然るべき位置に配したものが多いが、推定に幾分でも疑問が残るものについては年月の横に＊をつけた。

一、發信地が明記されていないものは、消印により、たとえば「鷗沼（消印）より」とした。

一、一枚で書ききれず、はがきを二枚、三枚とつづけている場合、枚数は示したが、接續のくぎりめは示さなかった。

一、筆、ペン、鉛筆の類の區別、用いられた用紙の區別などは示さなかった。

一、書簡の本文は、原形をできるだけ忠實に再現することにとつとめ、しいて文脈を整えるなどのことは一切行なわなかった。ただし、人名を○○で示し、明示することを差しひかえた場合がある。

一、繪はがきについては、必要と認められるものに限って、その繪、寫眞について注記した。

一、特殊のものについては、「一」を用いて編者の注記を施した。

一、かな遣い、送りがなは原形通りとし、脱字、衍字には「こ」を付した。

誤字、當字も、原形通りとし、「こ」を付さなかったものが多い。ただし誤讀のおそれある場合には「こ」を付した。字畫の酷似している誤字は正した。ただし澁谷の「常磐松」の住所に關しては、志賀自身も「常盤松」の字を用いている場合も多いので兩方を生かしそのままとした。

判讀不明の字は□で示した。

清濁は正した。變體がなは用いなかった。句讀點は原形を尊重した。漢字は正字體に組むことを原則とした。ただし筆者が常用した異體、俗用の字體はそのまま使用したものもある。

句點が無くて讀みにくいところは一字アキとした。

一、發信人の署名及び書簡中に見える『白樺』關係者のペンネームの類を左に記す。

無車(武者小路實篤)、伊吾(里見弴)、平澤仲次(長與善郎)、雨藤生・雨東生・十月亭(有島生馬)、雁來紅・里杲・はるさむ・小青(木下利玄)、萱野二十一(郡虎彦)、帆七(園池公致)、沙鷗・正親(正親町公和)、青蜩(正親町實慶)、芳舟(川村弘)、空華(吉光長一)。

目次

武者小路實篤	三
里見 淳	九七
梅原龍三郎	一九四
柳 宗 悅	二四五
長與善郎	二七五
*	
有島武郎	三〇九
有島生馬	三一三
木下利玄	三四三
正親町公和	三七八
細川護立	三八七
兒島喜久雄	三八九

園池公致	三九二
郡虎彦	四一三
三浦直介	四三〇
九里四郎	四四〇
山脇信德	四四七
岸田劉生	四六四
犬養健	四六七
*	
夏目漱石	四八七
清水澄	四八九
芥川龍之介	四九〇
北原白秋	四九一
谷崎潤一郎	四九六
佐藤春夫	五〇八
廣津和郎	五一一
廣津桃子	五二二

小林秀雄	五二三
谷川徹三	五二六
上司海雲	五三八
バーナード・リーチ	五五九
濱田庄司	五六〇
安井曾太郎	五六二
坂本繁二郎	五六四
小林和作	五六六
中川一政	五六八
小林古徑	五六九
安田靫彦	五七一
鈴木大拙	五七五
小宮豊隆	五七六
安倍能成	五八三
和辻哲郎	五八八
小泉信三	五九〇

吉井勇	五九二
川田順	五九五
中勘助	五九八
宇野浩二	六一〇
室生犀星	六一一
井伏鱒二	六一五
川端康成	六一七
小林多喜二	六三〇
中野重治	六三五
徳永直	六四〇
草野天平	六四四
田中英光	六五一
竹内勝太郎	六五三
桑原武夫	六五五
河盛好藏	六五七
本多秋五	六五九

北川桃雄	六六二
松村一人	六六五
舟木重雄	六六七
末永馨	六七〇
*	
瀧井孝作	六七七
尾崎一雄	六九七
網野菊	七〇六
藤枝靜男	七五四
直井潔	七五六
阿川弘之	七六八
後記	七九七
補遺〔志賀直哉書簡・メモ〕	八一七

志賀直哉宛書簡

武者小路實篤より

明治38年4月23日

〔はがき〕
東京麻布區三河臺町二十七へ

1

先日の内村サンの演舌は大層面白うございました。人の智慧のたのむべからずと云ふのは殊に面白く囚人の話は殊に感じました

あさき心もて、事をはからず、御旨のまに／＼ひたすらはげめ、風に折られしと見えしわか木のおもはぬ樹陰に人もや宿らん、(讀美歌集百五十二)

をその夜ふと讀んで非常に面白く思ひました

トウ／＼ユーゴの傳記を讀みました 中々面白うございました

今度の旅行には君は行かないさうですが行つたらどうですか、僕は此間學校を休みたくつてたまらなかつたのです 讀みたい本が澤山あるのとそれから學校がつまら

なくなつたからです。今はカーライルの傳を讀んでゐます。又正親町君から「逆境の恩寵」と云ふ本を借りて讀んでゐます、兩方面面白うございます 後書は確かに讀む價值があります 君は何をしてゐますか サヨナラ

實 篤

明治38年5月25日

相州三浦郡南下浦村字金田唐池勘ヶ由
小路方より〔封書〕
東京麻布區三河臺町二十七へ

2

僕が君に、「イワン、イリイチ」に就て高山が我宗教の發賣を禁じてこれを禁じないのは奇怪だと云つたのはあやまりであつた その小説は「燭」と云ふのでした、イワン、イリイチに就て氏は左の如く云つた、

トルストイ伯の「イワン、イリイチ」の如きも單に一病者の陰深なる苦悶を描寫したる外毫も他奇あるなし而も是等(ドーデの「ジャク」と「サホー」が前に出てゐた)の作何れも痛切深刻、たしかに一部人生の幾微に入るものありと

「文明批評家としての文學者」に出てゐました、この「文明批評家としての文學者」は一讀の價值があると思

ひます

"The Death of Ivan Ilyich" (1884) and "Resurrection" (1899) are in some ways the most powerful of all his works.

ト畫の澤山かいてある本の二十一頁に出てゐます、
通りのおわびかた／＼本の廣告をいたします

こゝに來てから少こしはよろしいが未ダ全快とは參り
ません、

先日の「現代の奴隸」の終りに「如何に我々は處置
へ〔行間〕行爲すべきか」(?)に徴兵のことなど書てあ
りますから御讀みになつてごらんさい、

甲板の上で時々時計を見て今時分は志賀の馬鹿が教場
でアクビしてゐるなと思ふと獨り微笑まれ候、

明日から、イブセンの「ロスマルスホルム」を讀もう
かと思つてゐますが……

今は「イワン、イリイチ」をソロリ／＼と讀みなほ
してゐます、何れ御面會の時くわしくは……

天壇の前に罪人どもあたるか／＼とびくついてゐる
時浪と小鳥の歌を聞き／＼つゝ麥穗をかすめる春風に
吹れて

午後一時、

大馬鹿野郎、

何云つてやがる君に、

實篤

明治39年11月16日

元園町より〔繪はがき〕
麻布區三河臺町二十七へ

3

君からのエハガキの畫は Hygiea と云ふので健康の女
神と思ふ、この神は蛇と盤を持つてゐて、この蛇は病氣
をなほすそうだ モリツの神話の「さし繪」に蛇と盤を
持つてゐる女神の畫があるのでそれだと察した 當つてゐ
ると思ふ、

貴問の答へにはいやしき美人と神々しき女神の彫刻に
對して考への異なるが如しと云へばそれでいいが、それ
では説明になつてゐない、心理學的に説明することは易
しいし君にも許されてゐるが、餘りかたくるしいからや
めて、優美と壯美とでも云つたらどうだ、いや淫美と神
美これも變んだ こんな熟字はしらない まあ椿の花と
星とぐらい云つてごまかそう この畫は何んと見える
罪を犯せる娘と思ふがそれとも失戀か病氣か、母がマリ
ヤの像を見てゐる處が面黒い 剪刀のぶらさがつてゐる

のはなぜだろう。

〔繪はがきは、タサエルの「不幸な家族」〕

明治39年12月28日

相州三浦郡南下浦村字金田唐池勘ヶ由

小路方より(はがき)

東京麻布區三河臺町二七へ

4

一昨日來た 伊東より伊豆に行つた時より波がひどかつたが例のやうに横になつてゐたからどうもなかつた、此處へ來てから輔仁會の雜誌に出そうと思つた「修養の根本要件」と云ふ英^{「イン」}そんな題の論文を書き終え、藪蛇と云ふ題の嫌味たつぶりの短い文を三つ四つ書た外は、ユロリで芋^{いも}を焼て食つたりしてゐる。讀書はまるで駄目、來春の雜誌で失敬だけれど早稲田文學とホト、ギスを送つてくれないか、ユーゴーのことは一寸傳記を見たが、セダンの談判に出たことは書いてなかつたやうだ、あれはユーゴーではないと思ふ、しかし斷言する程調べたのではない、

此處へ來ると東京の正月もして見たくなる、

十二月二十八日

明治40年1月10日

麴町(消印)より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

5

矢張りインフルエンザなのだよ、

餘程インフルエンザが氣にかゝると見えるね 熱の苦を十二分に知つたから安心してくれ もう熱がないが六日間熱にくるしみ一昨々夜寢汗三回一昨夜四回昨夜三回その毎に着物をきかへたりしたもので馬鹿につかれてゐる

木下氏の懺悔は三日に讀んだ 懺悔の苦痛(?)に一番感じた 今サンドキチを一人前食つた 朝飯と晝飯は食はなかつた

正月十日

病床にて 生

本屋に行きたくつてしかたがない、散歩もしたいもうじきなほるよ

明治40年4月15日

麴町(消印)より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

6

昨日は僕にとつて(恐らくは僕等にとつて)甚だ價値ある時であつた 自分の小説が如何に拙劣をきはめ、いかに取材が憐れでかたがきまり、文が拙かゞよくわかつた、

僕にはどうしても小説は書けないと迄で昨日は思つて何となく不快だつた、僕等は頭ばかり發達して(空想ばかり)修養が全くないのだ、僕等は人一倍苦しまなければならぬ。不^{ヤウ}要を以て人一倍なまけてゐる、しかも僕等の目指す處は二流三流ではないのだ、嗚呼僕等の昨日の作は僅か木ノスをのぞいて殆んどなつてゐないと云へると思つた、(自分等を小説家と見て)昨夜舊主人を讀んで殆んど感服した、僕等より遙かにく前方に進んでる旅客がなほ一心に歩いてゆくのに。して僕等の目的とする處は彼の旅客の目的より遙かに遠くはあるまいか、僕は云ふべからざる不安に打れて昨夜よく眠れなかつた、前途遼遠、今や第一足を踏んだ時に女々しいことはよくないが思つたまゝに。木ノスのですら返つて讀んだら、そうよくは思へなかつた、美しい、しかし不自然だ、百姓の妻に御京のようながあるだろうか、なくとも詩たるにさまたげがないとしても小さい、美しいことに於て僕等少なくとも僕のより數倍の價值はあるが、それですら、

明治40年4月23日

麹町(消印)より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

7

この頃少こし自分は墮落してきはしないかと心配したが此頃又向上して來た氣がして氣持がいい、僕はこの頃靈魂不滅ではないか知らんと思つてきた、それに死と云ふものはワツ、の畫きし如く親しむべきものゝやうな氣がしてきた、しかしこれは天壽をまつとうした時の死を云ふのだ、自殺や人殺を獎勵するのではない、

靈魂不滅はまだ疑ふ方が多いのだ、しかし二十日に君と別れて返つたら、祖母さんが危篤だと云ふ、僕はやせた手に右の手をふれて「祖母さん僕ですよわかつて」と云つたら、細い目を開いて「エ? エ?」と許り切云へないのだ、醫者はもうじき死ぬと云つて枕元にゐる、暫くして醫者に祖母さんが「ほんとに御氣の毒です 今日 はもうよろしいから返つて下さい」と明白に云ふ、皆驚いた、醫者が一番おどろいた、それから又今迄でのやうに明きり物が云へるやうになつた、あとで人から聞いたのだが、祖母さんはその時夢を見た、「自分は赤い門の處へ行つてその門の中に入りたくつてしかたがないのにそこに居る人が貴君はまだ入つてはいけませんとひどくとめて入れなかつたと云ふ夢」死にかゝつて生きた人は皆これに似たことを云ふ、何かこの内に意味はない

だろるか、僕はこの門は頭蓋骨の裂れ目ではないかと思ふ、笑ひ玉ふな、自分でも自分を笑ふがそう思へる、斷末魔の息で靈が飛び出すのではないかとも思はれる、腦病になつたり、した人は少こし變だが、要するに變な問題だ、又變な處が味のある處だらう、なんだかわからぬことを書いた、この葉書は君から電話がかゝつた後に書いたのだ、倫理は落第と自分できめた、しかし一通は讀むつもり。

明治40年4月25日

元園町より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

8

昨夜一晩くるしみ、今朝七時半遂に祖母死去いたし申し候、

四月二十五日

元園町 武

明治40年5月27日

元園町より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

9

これから火曜日の稽古は僕の處でやつてくれないか、眞面目に勉強するから、その方が話もしいゝ(話の方がかも知れない)

昨夜は面白かつた、今朝も本も讀めず筆もとれない、しかし何となく氣持がよい、今電話をかけたら正親町が來ると云つた、

昨日の話のは馬太、十二章三一、三二、だ、一寸と讀んで見玉ひ それから馬太の二十三章は實に痛快だ、五六、七章をぬかしては馬太では二十三章が好きだ 偽善者の惡口として實に痛快、

明后日また逢ふからこれで 電話がゝかなければ宅で待つてゐる、

五月二十七日

明治40年6月27日

元、より(はがき)
麻布區三河臺町二七へ

10

どうだい、相變らずかい、よくはならないかい、明日は徴兵検査助かるにきまつてゐるから少こしも心配ではない、

この頃になつて人間の平等と云ふことを益々信ずるやうになつた、尊敬するのはいい、しかし尊敬を強ゆべからず、自分の考は今勢力のある思想と甚だちがつてゐることをこの頃更に痛切に感じてゐる、